ちょっとしたスペースを生かして自作のミニオブジェ（写真前列）やお気に入り作家の作品を飾っている荻野さん。後列の左作品は高木叔子さんの一輪挿し。右作品は掘込和佳さんのニホンオオカミ。

窓辺に横一列に並ぶ右手を挙げたシンプルな招き猫のオブジェ（高さ7㎝）がなんとも可愛い。一輪挿しにもなる。

巻頭特集
箱庭
グリーン

ミニオブジェがとりまく心地よい暮らし

荻野揺子さん（埼玉・久喜）

前ページで紹介したcroppefarmの多肉植物の箱庭に飾られたミニオブジェは、作者である荻野揺子さんの自宅の片隅にもさり気なく飾られている。

「暮らしに欠かせない物ではないけれど、空きスペースに2、3つ置くだけで空間の雰囲気が変わります。心が潤いますよね」と話す荻野さん。手づくりの温もりや遊び心のある造形、素朴な質感を好み、お気に入り作家のオブジェも並んでいる。

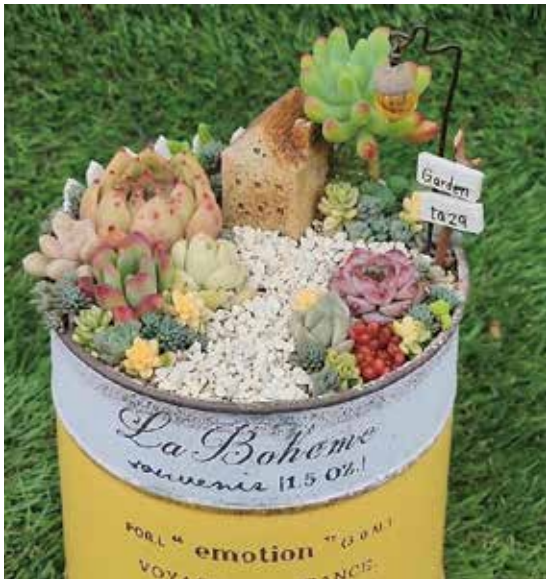
荻野さんは本誌「陶遊195号」の多肉植物の鉢特集にも登場していただいたが、制作の中心は日常の器や植物鉢で、ミニオブジェを創り始めたのは2年ほど前。

「最初は家やミニカーと同じ近江土と白化粧で細長の四角い花器を作っていて、その時の素朴な風合いが気に入り、試作で招き猫の一輪挿しを作ったらイメージどおりに。オブジェは素材感が大事だと思っていて、近江土のザラっとした質感に白化粧の風合い、素材感をオブジェで表現したいと創り始めたのがきっかけですが植物と繋がるとは……新しい世界観ですね」

croppefarmの黒崎さんが自身の多肉植物の寄せ植えに、荻野さんの家やミニカーを飾った箱庭作品がインスタグラムで発信されたのを機に他の植物関係者にも目が止まる。次ページに紹介するリトルガーデンハートさんもその一人。クラフト市でも好評で、訪れたお客さんの中には10、20個まとめて購入されていくことも。特に陶器の家やミニカーは造形の珍しさもあってお客さんは不思議そうに手に取り、そこから対話が生まれるという。

「croppefarmさんの箱庭写真と一緒に展示していると、多肉が好きそうな方は興味を示してくださる方が多いですね」

最近では風車や水車のリクエストもあるそうだが、自分の表現とは違うため断ることも。



多肉スタイリストで多肉植物の寄せ植え講師やモルタルデコマイスター認定講師を務めるリトルガーデンハートさんも荻野さんのミニオブジェ愛用の一人。（写真上）。可愛くて初級者でも作りやすい寄せ植えを目指している。

リトルガーデンハート
インスタグラム

屋根の装飾に使っている青さび釉は荻野さんお気に入りの釉薬で、食器や花器にも使用。厚掛けは青銅のような渋緑色に、薄掛けは明茶色に発色するのが特徴。

フェルムドフェスティバルで出展した荻野さん（写真上の左側）のブース。アンティーク調の器類と一緒に並べたミニオブジェに、来店者の多くが興味津々に手に取る。

ミニカーはセダンタイプが主だが、色は白、黒、飴、ベージュなど数種類を制作。白や黒はお客さんからのリクエストで作り始めた。

「もともと土の素材感や素朴さが好きで、その質感や土の存在感を造形に生かしたいと思ったのが私の陶表現の原点なので、凝り過ぎてはいけない。そこは大事にしたいと思っています。もちろん植物とコラボする新しい世界観を広げていただいて嬉しいのですが、私自身は家のちょっとした空間に飾ることで心地よさを感じていただけたらというスタンスで、いつもより少し潤うような空間を楽しめる作品を創っていきたいですね」

荻野揺子　（おぎの・ようこ）

さいたま市生まれ、久喜市在住。武蔵野美術大学造形学部油絵学科版画コース卒業。学生時代は抽象画・版画を専攻。1992年陶芸を始める。2017年10数年県立特別支援学校において美術教諭として陶芸の授業を担う。生産的製品を作りながら作品の制作に興味を持ち、2020年に本格的に陶芸に専念。関東圏クラフトマーケットでの出展を続ける。2021年陶芸教室縄文舎所属。同年陶芸文化振興財団岩槻教室のスタッフを務める。

ホームページ

インスタグラム

◎展示・イベント出展情報

8/4〜23　道案内カフェnoumachi(埼玉・宮代)
9/30　bizarre farm fes(埼玉・吉見)
10/28〜29　bizarre park monthly10(埼玉・鴻巣)
11/5　小松屋マルシェ(栃木・栃木)
11/26　久喜マルシェ(埼玉・久喜))

三角屋根の家をつくる

イメージはヨーロッパの旧市街や歴史地区を彷彿する三角屋根の白壁の家。ポイントは力を入れやすいペティナイフで直線で直角に断面はスパッとカットすること。並べた時に整然とした美しさが表現できます。

◉作品データ　[寸法]W2・5×D2.5×H4cm　[粘土]近江土(黄)
[装飾]白化粧・青さび釉　[焼成]電気窯・酸化焼成・1230〜40°C・13時間

家本体のパーツをつくる

ポイント
切断面が直角になるようナイフは垂直に下ろします。片方の手でナイフの峰(刃の反対側)を押さえると切りやすくなります。

② 角棒粘土を2.5〜3センチ幅にカットする。断面を直線で直角にカットするため、しっかりした刃で力を入れやすい小型ナイフがお薦め。直線がブレないよう刃先を角材に当ててスパッと切り分ける。

ポイント
カッターなどのしなりやすい薄い刃より、ナイフや包丁などの硬く厚みのある刃物のほうが切りやすくシャープな線になります。

① 近江土(黄)を3×4センチの角棒状に形作り、高台が削れる程度の硬さまで2週間程度置いて硬くする。急激な乾燥はNG。発布スチロール箱などに入れ、蓋をずらした状態で粘土の外側と芯が同じ硬さになるようゆっくり乾かす。

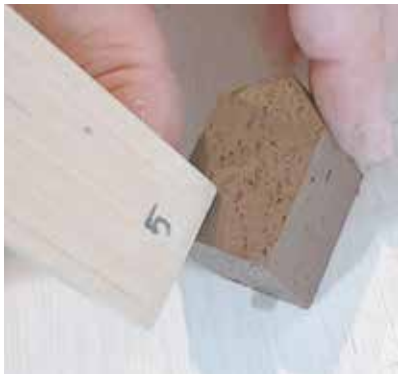
◉使用道具

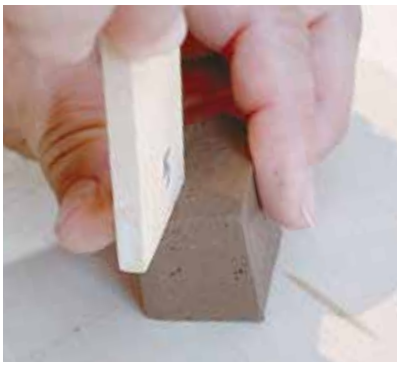
《タタラ板》 3〜5ミリ厚を用意。家のドアや車の窓の装飾に使用。

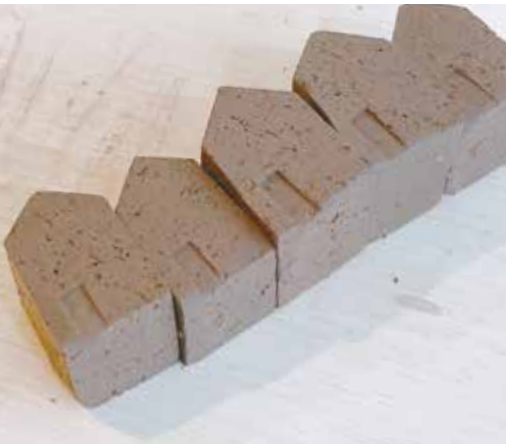
《角材》 5センチ厚程度。家や車の本体を直線、直角に切り出す時に使用。

《ペティナイフ》 家や車の本体を直線、直角に切り出す時に使用。

三角屋根に切り出す

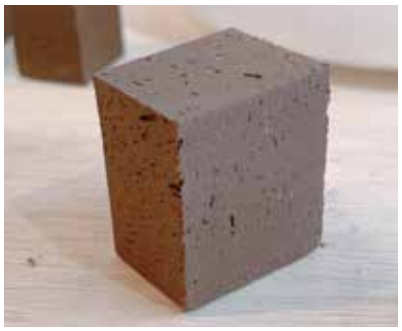






⑤　中心からやや左寄りに5ミリ厚のタタラ板を深さ1ミリ程度を目安に押し当て、高さ1センチ程度のドアの装飾を施す。

ポイント
タタラ板を強く押し過ぎると粘土が底や左右へ迫り出して形が歪むことがあります。変形した部分は削ぎ落とし、直角面に修正します。



④　切り出した角柱の片側に50〜60度程度の斜度をつけて屋根を切り出す。左右対称になるようナイフは垂直に下ろす。

ポイント
屋根の角度は各自自由でかまいませんが、左右対称と同時に、表裏も対称になるようチェックしましょう。

家のパーツを直角面に切り出す

③　家のパーツ全面をシャープな直角面に整えるため、その他の面もナイフで削ぎ落とす。削りカスは容器にまとめ、水ヒして再利用する。

ポイント
粘土が硬くなり過ぎているとナイフでスパッと切れません。無理に切らず、霧吹きで湿らせ1、2時間寝かせます。粘土に水が浸透してくると柔らかくなってくるので、適当な硬さに調整しましょう。

◉使用道具

《ステンレス コテ》　家の屋根や車の装飾に使用。

《ルレット》　家の屋根や車の装飾に使用。

《アクリル角棒》　２ミリ角を用意。家の窓の装飾に使用。

屋根に模様をつける

《点線模様》
ルレットやコテはある程度力を入れて押し当てて深めに模様付けする。点線は平行ではなく、あえてランダムに動かしながら勢いでできた自然な線を生かす。良い意味で力の抜けた部分を取り入れる。

《引っ掻き模様》
コテは斜面に平行に当て、手前に引き寄せる。引っ掻きも勢いが大事で、ある程度力を入れることでキズが深くシャープな線になる。

ポイント
バリ取りは生素地の時点で行うと、せっかくの引っ掻き線が薄くなってしまうので、乾燥後、または素焼き後に行います。

家のドア・窓を装飾する

⑥　アクリル角棒で家の表や裏、左右にお好みで窓を装飾する。ドアよりも若干深め（2ミリ程度）に押すと、視覚的にも分かりやすくなる。

ポイント
窓同士の間隔が近すぎると窓の形が潰れてことがあるので、注意しながら押しましょう。潰れた場合はコテで均して修正、もしくは失敗した断面を削ぎ落としてから改めて押し直します。

白化粧、青さび釉で装飾する

⑩　白化粧後、かなり薄め（シャバシャバ状態）の青さび釉を壁面にランダムに塗る。一方の屋根は通常の濃さ（55ボーメ）の青さび釉をスポンジで叩くように2、3回塗り重ねる。青さび釉は本焼きすると厚掛けは渋い深緑色に、薄掛けは明茶色に発色し、色合いの変化が特徴的。本焼きデータは32ページ参照。

⑨　素焼き後、屋根のバリを取り払い、出っ張り部分はヤスリ掛けする。屋根と壁に白化粧（マヨネーズ程度のとろみ）をランダムに塗った後、指で部分的に擦り落として濃淡をつけ、古色感あるレンガ風の表情にする。

ポイント
特に角壁の白化粧を落とし素地面を出すことで、家の輪郭が際立って全体がシャープに見えます。

煙突をつくる

⑧　煙突を接着し、上から押さえて圧着する。壁からはみ出さないよう煙突は壁と垂直になるように整える。1週間程度ゆっくり乾燥させ、素焼きする。

ポイント
家本体は無垢なので芯まで完全乾燥させるため、最初は発砲スチロール箱の中で1週間程度ゆっくり乾かし、その後箱から出して1週間、室内で完全乾燥させます。

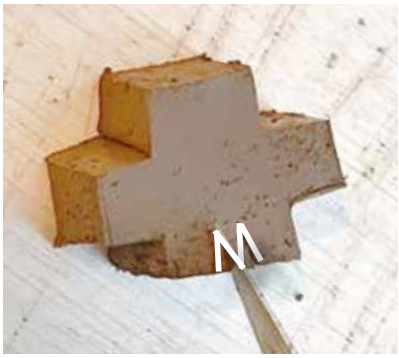
⑦　長さ2センチ、幅4ミリの角柱に切り出し、45度で二等分し煙突のパーツを作る。煙突を屋根に仮当てて、必要な場合は角度を微調整する。接着面にドベを塗る。

セダンスタイルのミニカーをつくる

車の形にするために家よりもナイフで切り落とす部分が多いので、切る角度に気をつけます。表裏を同じ角度に切らないと形が違ってしまうので、ナイフを垂直に入れることがポイントです。

◉作品データ
[寸法] W3・5×D2×H2.5㎝
[粘土] 近江土(黄)(／左・中央)、黒泥土(右)
[装飾] 白化粧・飴釉
[焼成] 電気窯・酸化焼成・1230〜40°C・13時間

車本体のパーツに切り分け、セダンスタイルに切り出す



③　タイヤの形に切り出すため、真ん中を白線(写真上)のようにナイフで「M字」に切り込みを入れる。

②　表裏の角度がずれていると格好が悪いので、クッキー用の抜き型や平線カキベラ、カンナなど直角型を利用すると綺麗で簡単に切り抜ける。

①　車本体のベースは、家と同じ要領(32〜33ページ①〜③参照)で3×4センチの角柱に切り出し、4つある角を1センチずつ直角にナイフで切り落とす。

◉使用道具、

《アルミカンナ・竹ひごの後面》車のタイヤ、ライト、テールランプの装飾に使用。

《アルミカンナ》　平線タイプ(幅約1.4ミリ)車の前輪と後輪の間を削り出す時に使用。柄の後部はライトやタイヤの装飾に使用。

《平線カキベラ・L字カンナ》

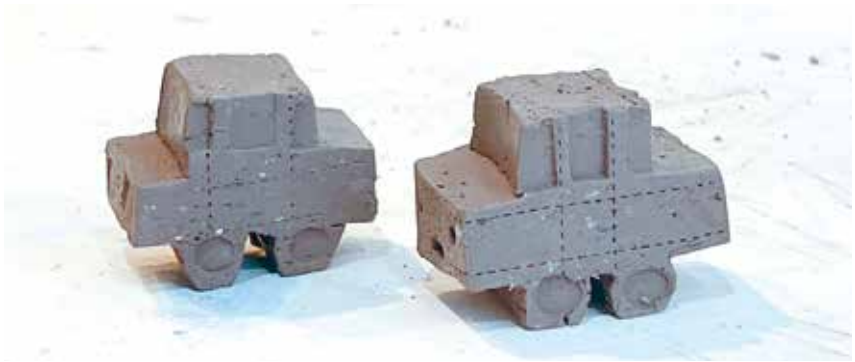
《クッキー用の抜き型》

各道具の直角部分を利用し、車のボディを直角に切り抜く時に使用。

ライト、テールランプ、ボディ全体に模様付けする

⑥　テールランプの中間に5ミリ幅の平角型でナンバープレートを表す。仕上げにボディの表裏にステンレスコテで縦横に点線模様を数本、ランダムに入れる。

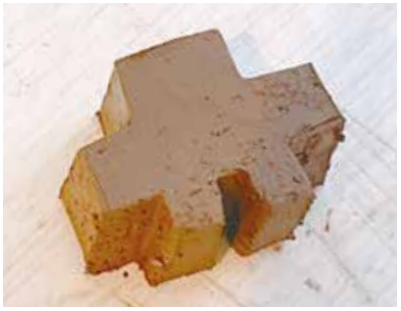
⑤　正面のライトは丸型（写真はアルミカンナの後ろ面）で深さ1ミリに、背面のテールランプは竹ひごの後ろ面で深さ2ミリ、それぞれ押し当てて装飾する。



⑦　2週間程度ゆっくり乾燥させ、素焼きする。施釉も基本は家と同じ要領。白タイプは白化粧のみで焼締。焼成データは36ページ参照。

アドバイス
ミニカー本体が無垢状態なので、家と同じ要領で芯まで完全乾燥する。施釉も基本は家と同じ要領。白タイプは白化粧のみで焼締。

タイヤ、窓を装飾する



④　残った出っ張りを平線のアルミカンナで切り落とし、タイヤ部分を削り出す。カンナの後ろ面など丸型でタイヤを、窓は5ミリ厚タタラ板を深さ1ミリぐらい押し当て、それぞれ表裏に装飾する。